

豊臣ファミリーの時代

新京都 戦国地図本



豊臣秀吉



豊臣秀長

文・鳥越一朗

特集 豊臣秀長の生涯

全国に戦乱の嵐が吹き荒れた戦国時代、天下人たれんとする有力武将は、日本の首都であり、政治経済の中心である京都の制圧に挑んだ。足利義昭を奉じて入京した織田信長、信長の後を継いだ羽柴(豊臣)秀吉、秀吉の没後、豊臣氏を滅ぼした徳川家康——彼らは京都でどんな行動をとり、いかなる痕跡を残したのか。本書は、特集「豊臣秀長の生涯」を通じて、彼らの動きを概観するとともに、そのゆかりの地を徹底的に拾い上げたガイド本である。巻頭には関連地図、巻末には系図や年表も掲載しているので、本書を手にも各エリアを巡れば、戦国時代の京都の雰囲気を存分に味わっていただけるだろう。では、いざ、出陣!

はじめに／目次	2
室町～戦国時代の日本全図	4
関連城跡位置図	6

特集 豊臣秀長の生涯

1 出自～貧農の生まれ～	8	20 山崎合戦で大功～天王山の陣地を守る～	23
2 生まれた時代～群雄割拠の世～	9	21 賤ヶ岳の戦いで大功～木ノ本の陣で耐える～	24
3 兄・秀吉の出兵～乏しい兄の記憶～	9	22 小牧・長久手の戦い～信雄と直接交渉する～	26
4 秀吉からの誘い～百姓から侍の道へ～	10	23 紀州攻め～焼き討ちと水攻めの猛攻～	28
5 美濃攻めに貢献～兄の危機を救う～	11	24 四国征伐～兄に代わって総大将を務める～	29
6 信長の上洛～都の空気を知る～	12	25 大和・紀伊・和泉を統治～一族最大の大名に～	29
7 金ヶ崎の退き口～殿の第一段目を任される?～	13	26 家康との関係～友情を交わす義兄弟～	30
8 義昭追放～將軍の末路を憐れむ～	14	27 九州征伐～大友宗麟に頼られる～	32
9 小谷城攻め～強靱な体力～	15	28 聚楽第行幸～公家となる～	33
10 長浜城築城～城主となった兄～	16	29 鶴松の誕生～兄との間に隙間風が～	34
11 伊勢長島の陣～兄の名代として戦う～	16	30 小田原攻め～留守居役を務める～	35
12 安土城築城に貢献～主君・信長の覚えもめでたく～	17	31 秀長死後の豊臣家～心残りが現実のものに～	36
13 手取川の戦い～泰然自若のふるまい～	18	32 豊臣秀長を取り巻く豊臣ファミリー	38
14 中国(毛利)攻め開始～官兵衛との機縁～	18		
15 但馬攻め～初めての城代～	19		
16 三木城陥落～親月の宴～	20		
17 丹波攻め～寛容の精神～	21		
18 鳥取城攻め～「渴殺し」の惨状～	22		
19 備中高松城攻め～小舟上の舞を見る～	22		

信長と京都	13
秀吉と京都	25
家康と京都	31

エリアガイド

京都広域図	44
京都中心部地図	46
近畿地方地図	47

01 京都駅	48	24 嵐山・嵯峨	108
02 東寺	51	25 愛宕山	111
03 豊国神社	52	26 亀岡	112
04 八坂・清水	56	27 鞍馬	113
05 建仁寺	59	28 大原	114
06 知恩院	60	29 比叡山	116
07 南禅寺	62	30 東福寺	118
08 金戒光明寺(黒谷)	64	31 伏見稲荷	121
09 哲学の道界限	66	32 伏見桃山	122
10 一乗寺	68	33 中書島	124
11 相国寺・阿弥陀寺	70	34 醍醐寺	126
12 西陣	74	35 山科	129
13 聚楽第跡	78	36 宇治	130
14 二条城	81	37 勝竜寺	132
15 京都御苑	82	38 淀	133
16 新京極界限	86	39 山崎	134
17 旧本能寺跡界限	90	40 石清水八幡宮	135
18 上賀茂神社	93	41 大和郡山	136
19 鷹峯	94	42 安土・近江八幡	139
20 大徳寺	96	43 坂本	140
21 北野天満宮	100	44 長浜	142
22 妙心寺界限	104	45 和歌山	144
23 鳴滝・高雄	107		

豊臣一族関連系図	146
京都戦国年表	148
豊臣秀長関連年表 天正5年(1577)～	150
索引	156
主な参考文献	158
あとがき	159
執筆者プロフィール／奥付	160

神社

寺

石碑

バス停

史跡

公家屋敷

寺社・武家屋敷

御土居

現在の敷地

旧水系

本書地図では、安土桃山～戦国～江戸時代前期の物件敷地を以下色で現在の地図と重ね合わせて表記してあります。

豊臣秀長の生涯

天下人を目指す豊臣秀吉を影日向に支えた弟の豊臣秀長——彼の存在がなければ秀吉は天下一統を成しえなかっただろうともいわれる。秀吉の栄達に伴い、秀長は従二位権大納言という官位を得、紀伊・河内・大和百万石（73.4万石）を領有する大大名となる。しかし、その破格の待遇に比して、彼の行動や人柄について、戦国史の中でスポットが当たることはなぜか少なかった。そこで、後世の伝記や編纂物を含め、関連する史書から、秀長の足跡を掘り起こし、駆け足でその実像に迫ってみたい。



図1 豊臣秀長（春岳院所蔵）

1 出自 ～貧農の生まれ～

秀長は天文9年（1540）3月2日、尾張国愛知郡中村（現・愛知県名古屋市中村区）で生まれたとされる。幼名は小竹、のちに小一郎と称した。秀吉とは3つ違いで、6つ上の姉・ともと3つ下の妹・朝日姫の4人きょうだいであった。『太閤素生記』などによると、4人は共通の母・なかを持つが、父については、秀吉とともに木下弥右衛門、秀長と朝日姫は筑阿弥としている。なかが弥右衛門の死後、筑阿弥と再婚したため、秀吉と秀長は異父兄弟とい

うのが通説であった。ところが、瑞龍寺所蔵の木下家系図を見ると、弥右衛門の死亡は天文12年（1543）で、その時すでに秀長も朝日姫も生まれており、なかの浮気がないかぎり、4人は同父同母のきょうだいということになる。現在はそちらの説のほうが有力のようだ。

弥右衛門と筑阿弥については、はっきりした素性は分からず、『太閤素生記』などでは、弥右衛門は織田信秀の鉄炮足軽、筑阿弥は織田信秀の同胞衆とするが、秀吉が天下人となってからの創作の可能性が小さくないらしい。一方で、宣教師ルイス・フロイスは、秀吉のことを「貧しい百姓の倅」と書き残しており、『甫

庵太閤記』では「父もとより貧しく、（秀吉は）十歳の頃より人の奴婢たらむ事を要とし…」とあり、貧農であったことが窺える。

これらに鑑みれば、秀長は親きょうだいとともに、尾張中村の地で野良仕事に従事しながら、決して豊かとはいえない子供時代を送ったのだろう。

2 生まれた時代 ～群雄割拠の世～

秀長が生まれた頃、日本は戦国時代の真只中にあった。尾張国の周辺では、同国の織田氏、三河国の松平氏、美濃国の斎藤氏、信濃・甲斐国の武田氏、駿河・遠江の今川氏らが、越後国の上杉氏、相模国の北条氏も交え、有力戦国大名として互いに覇を競い合っていた。

織田信長像（清洲公園）



清洲城模写天守（愛知県清須市／地図7頁）

織田氏は尾張国の守護・斯波氏の被官であったが、斯波氏の衰退とともに台頭し、中でも弾正 忠家の織田信秀は織田氏の支流でありながら、尾張国内で勢力を拡大し、信秀の跡を継いだ信長は、織田氏の他家を滅ぼすとともに、弟・信行（信勝）を排除し、尾張国の支配を固めつつあった。

3 兄・秀吉の出奔 ～乏しい兄の記憶～

『太閤素生記』によると、秀吉は7歳の時、父・弥右衛門の死に伴い、寺の小僧に出された。その後、放浪生活を経て今川氏の家臣で遠江頭陀寺城（静岡県浜松市南区）の城主だった松下氏に仕えた。そして18歳の頃、尾張国に戻り、機会を得て織田信長に小者として雇われたという（信長の冷えた草履を懐に

入れて温めたという有名なエピソードはこの頃のものであろう)。信長は永禄3年(1560)、今川義元を桶狭間の戦いで破り、その後尾張国を統一した。秀吉は清州城を本拠とする信長のもとで頭角を現していくのだが、秀吉が家を出たのが7歳だとすると、秀吉はまだ4歳ということになり、彼の頭に兄の記憶は余り残っていなかったのかもしれない。

4 秀吉からの誘い ～百姓から侍の道へ～

秀吉が確かな史書に出てくるのは、34、5歳の頃からである。その頃には秀吉配下の武将として、また行政官として重要な働きをしている。このような技量は一朝一夕で身に付くものではなく、何年もの経験を要したはずである。では、中村で農業に勤しんでいた秀吉が、いつ戦国武士の道へ進むことになったのか。

『武功夜話』にこんな話が出てくる。永禄5

年(1562)、足輕百人の組頭となり、50貫文の給地をあてがわれた藤吉郎(秀吉)が、故郷の中村にやって来て秀吉に懇願した。

「百人頭に出世したものの、残念ながら頼みとする者が唯の一人もいない。乱世にあって名を後世に残そうと思っても、それでは心細い限りだ。ぜひ鎌を捨て、我に力を貸してほしい」と。

秀吉は武辺の志もなく、中村でひたすら百姓に勤しんでいたが、秀吉の熱心な誘いに心を動かされ、思いがけなく兄の片腕として、織田家に仕える身になったのだという。もしそうなら、この時秀吉は23歳、当時としては、遅すぎる人生の決断であったといえよう。

ちなみに『武功夜話』は、昭和34年(1959)に発見された、戦国時代の土豪・前田家の文書で、内容の真偽にいまだ論争があるものの、秀吉についてかなり詳しく記されている。

この話で注目すべきは、まだ織田家の中間管理職に過ぎなかった秀吉が「頼みとするただ一人の者」として、秀吉を選んだということだ。適齢の血縁者がほかにいなかったからかもしれないが、箸にも棒にもかからないような凡庸な人物であったなら、秀吉も声を掛けなかったに違いない。

もう一つは、秀吉が立身出世に全く興味を持っていなかったという点である。秀吉に勧誘されなければ、おそらくは一生を一農民で終えたのであろう。この逸話は、秀吉の奥ゆかしい人柄と潜在能力の高さを物語っている。

ところで、秀吉は永禄4年(1561)にねねと結婚した頃から「木下藤吉郎」と称していた。秀吉は、秀吉に仕えるようになって、「木下小一郎長秀」を名乗るようになる。長秀の名は、信長と秀吉の名から1字ずつ取ったといわれる。したがって、当然「秀吉」ではなく「長秀」なのであった。



岐阜城(岐阜県岐阜市/地図7頁)

5 美濃攻めに貢献 ～兄の危機を救う～

その後、秀吉は秀吉のもとでどのような活動をしていたか、主なところを探ってみよう。当時、秀吉の仕える織田信長は、三河国の徳川家康と同盟を結んだうえで、美濃攻めに注力していた。永禄7年(1564)、信長は東美濃に進攻するため、秀吉に木曾川対岸の鵜沼城(岐阜県各務原市)を攻めるよう命じた。

秀吉は城主・大沼次郎左衛門の調略を試み、和議に持ち込むものの、信長は次郎左衛門の変心を恐れて、殺害しようとする。秀吉は良心の呵責から次郎左衛門を逃がしたといわれるが、この攻城戦に秀吉は初陣として参加していて、和議の後、尾張に戻ろうとする秀吉が、和議を知らぬ美濃方の長井隼人佐(道利)の兵300に襲われた時、150の兵を率いて長井勢の側面を突き、兄の危機を救ったという(「長井隼人佐と関、関城主長井隼人佐」新修関市史通史編)。

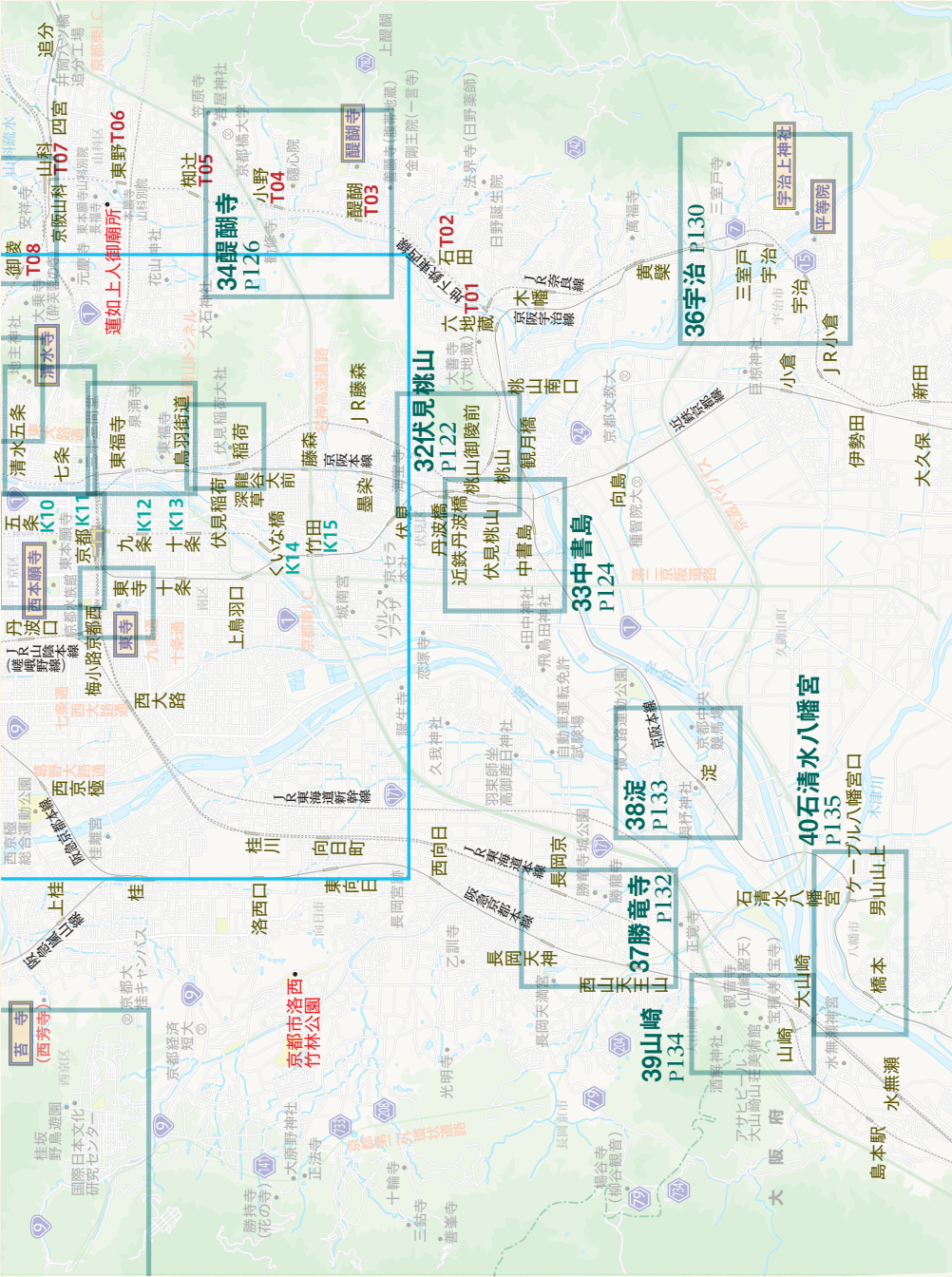
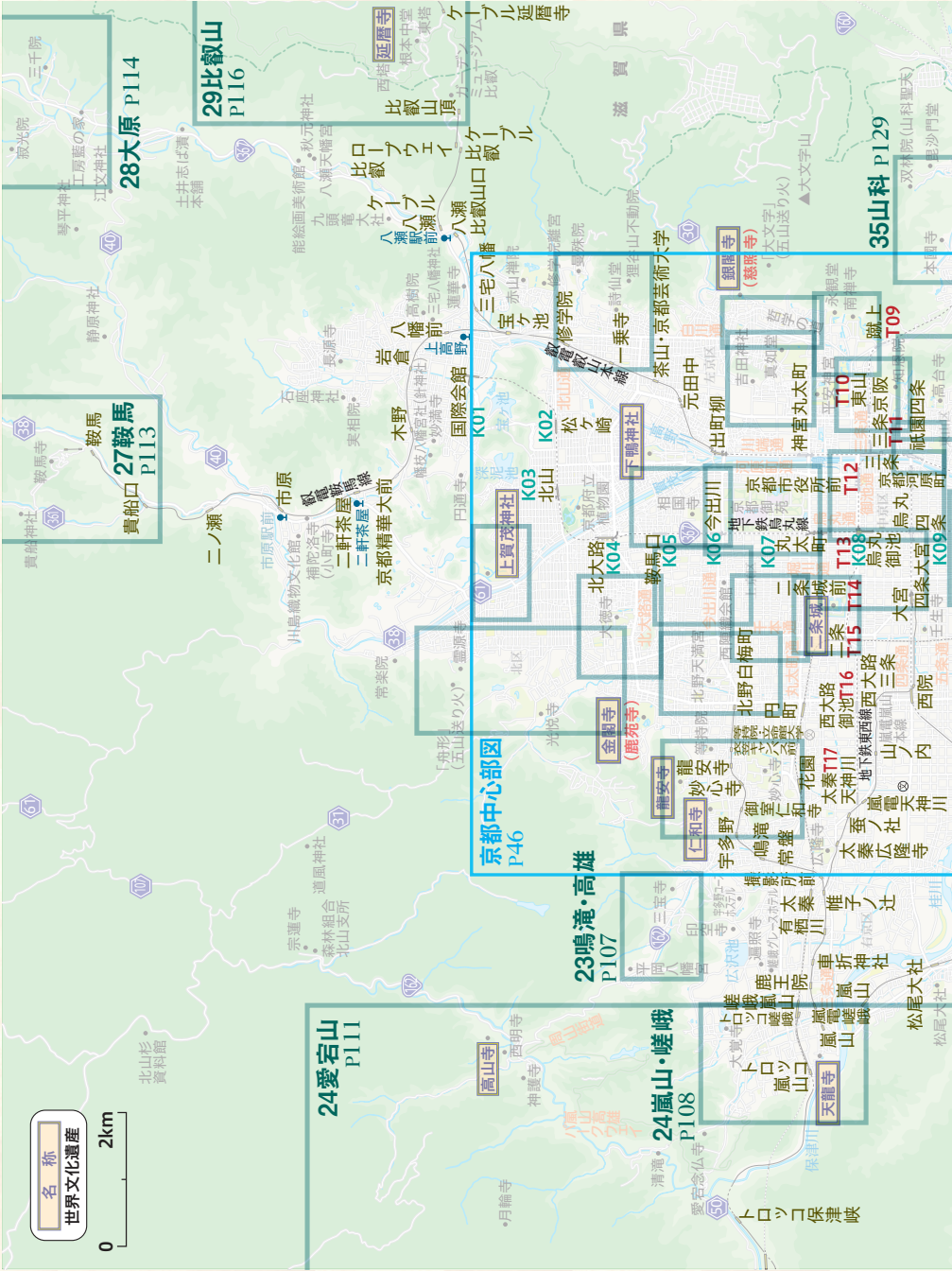
また永禄9年(1566)、秀吉は信長に、長

良川と犀川などが合流する墨俣での築城を進言した。稲葉山城の斎藤龍興を攻略するためには、墨俣は戦略的に重要な場所であり、信長も数年来築城を試みてきたが、そのたびに水害や斉藤方の攻撃によって失敗を繰り返していた。信長は秀吉を見込んでその進言を受け入れる。許可を得た秀吉は、川の氾濫の影響を受けない高台を選び、周囲に幾重にも馬柵や鹿垣を築き、長良川の上流から密かに筏で木材を流して、斉藤側の攻撃を受けながらも、一夜で城を築き上げた。世に言う「墨俣一夜城」である。

『武功夜話』によると、築城に当たって秀吉は、土豪の蜂須賀小六(正勝)らを味方につけ、頻繁に打ち合わせを重ねたが、彼らが秀吉に協力したのは、一つには秀吉の誠実で仁義に厚い人柄に惹かれたからだという。打ち合わせの際、秀吉は小六らに対し「私のごとき者が申すのもおこがましいが」と前置きしたうえで、小六らのこれまでの尽力に感謝するとともに、今回も兄を成功させるために是非とも助力をと懇願しているのだ。



京都広域図



13 聚楽第跡

豊臣秀吉が築いた聚楽第のあったエリアで、聚楽第址碑のほか、秀吉が毘沙門天を寄進した華光寺や秀吉が必勝祈願を行った福勝寺などがある。

秀吉の権力の象徴 聚楽第址碑

聚楽第は、豊臣秀吉が天正15年(1587)、権力を誇示するため、平安京内裏跡に造営した邸宅兼政庁。東西600m、南北700mの広大な敷地に堀を巡らせ、金箔も多用した絢爛豪華な平城だった。甥の豊臣秀次に閨白を譲った後は、秀次の居宅となったが、淀殿が秀頼を産むと、秀吉は秀次を追放して切腹に追いやり、その後聚楽第は徹底的に破壊された。現在2カ所に跡碑が立つ。



聚楽第大名屋敷の1つ 直江兼続・上杉景勝屋敷跡碑

聚楽第があった時期、その外郭には多くの大名屋敷が建てられた。上杉景勝は豊臣政権五大老の1人で、直江兼続は景勝の家臣。豊臣秀吉の死後、景勝に上洛を求める家康に対し、兼続が有名な「直江状」を出して家康の勘気を買い、会津出兵、関ヶ原の合戦につながった。戦後景勝は、会津120万石から米沢30万石に減封となったが、大坂の陣では徳川方として参戦、活躍した。



秀吉の軍師の邸宅跡 黒田如水邸跡碑

黒田如水(官兵衛)は播磨の生まれで、織田信長・豊臣秀吉に仕え、軍師として播磨・中国・四国・九州攻めなどで活躍した。荒木村重が反旗を翻した際には、説得に赴いた有岡城(のちの伊丹城)に1年間幽閉されるという悲惨な目に遭っている。聚楽第ができると、その東北部に屋敷を築いた。現在この付近を如水町というのは、如水の屋敷にちなんだものである。徳川幕府設立の翌年に病没。



上京区一条通黒門東入如水町
Kamigyo-ku Ichijo-dori Kuromon higashiiru Nrysui-cho

如水町地名版

聚楽第の外堀跡に建てられた 松林寺

慶長13年(1608)、清印を開基として東山黒谷に創建された浄土宗の寺院。清印が

重病の母の回復を祈願したところ、薬師如来が現れ、婦人病や安産に効く秘薬の処方方法を伝授したと伝わる。その後当地に移転。境内が周囲より一段低くなっているのは、聚楽

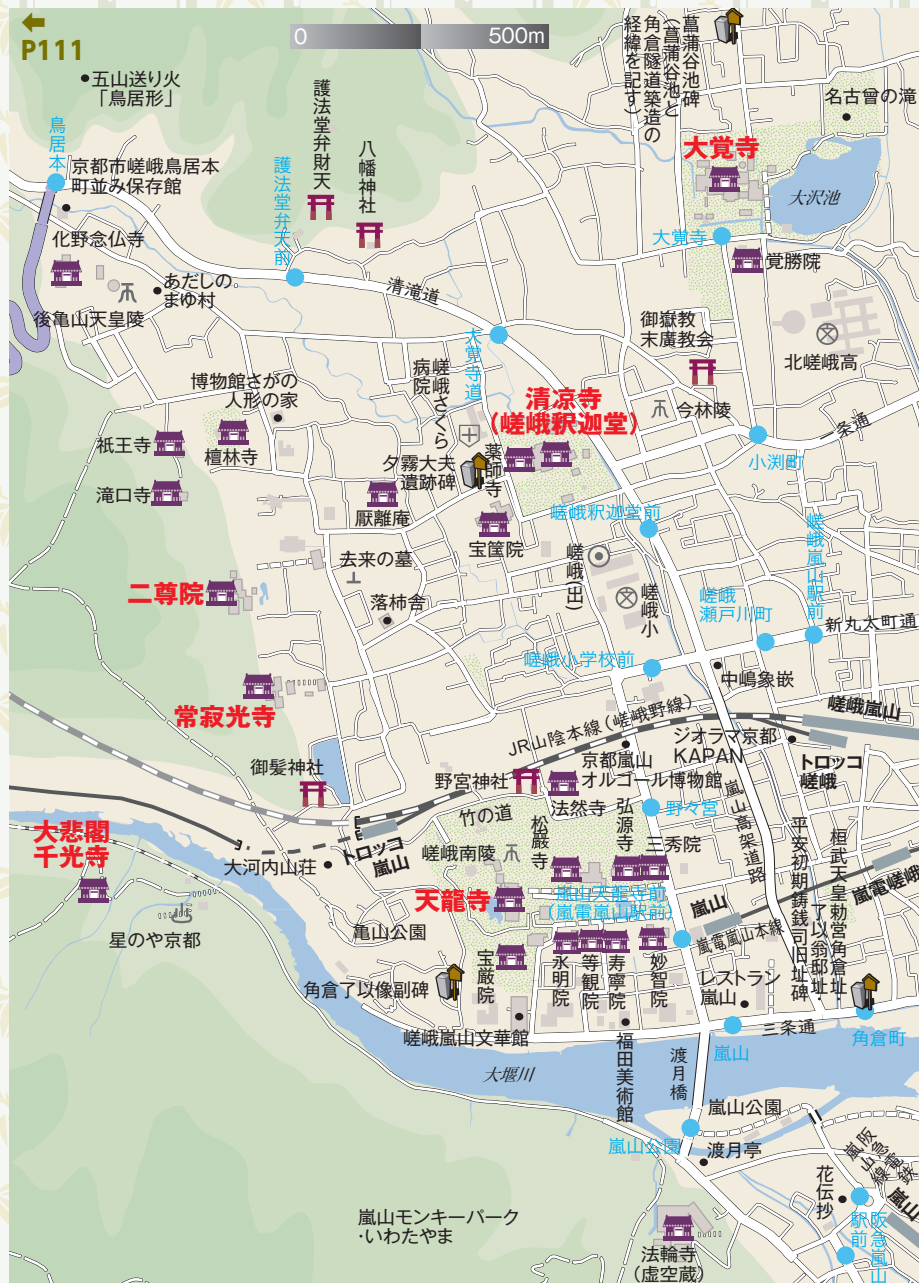


第の南外堀跡に当たることによるもので、門前にそれを示す石柱が立つ。また、当寺は平安宮の内裏があった場所の東辺に位置する。

☎075-841-5880
京都市上京区智恵光院
通出水下分銅町575
アクセス：バス停「千本出水」より5分

嵐山・嵯峨

洛西に位置する観光名所の多いエリアで、豊臣秀吉が復興に寄与した天龍寺や、豊臣秀頼の首塚がある清涼寺、伏見城の門を移築した二尊院などがある。



伏見城の薬医門を移築 二尊院

平安時代の初期に円仁が創建したと伝わる天台宗の寺院。勇壮な門構えの総門は、豪商・角倉了以が慶長8年(1613)に伏見城の薬医門を貰い受け、移築したものといわれる。この門をくぐると、「紅葉の馬場」と呼ばれる参道が続き、秋は紅葉に彩られる。境内には角倉了以の墓のほか、鎌倉時代の初期に藤原定家が『小倉百人一首』の選定をしたという時雨亭の跡がある。



☎075-861-0687
京都市右京区嵯峨二尊院門前長神町27
アクセス:バス停「嵯峨釈迦堂前」より10分
時間:9時~16時半
料金:大人600円

本殿は伏見城の客殿を移築 常寂光寺

日蓮宗の寺院。文禄5年(1596)、角倉了以から土地の寄進を受けた日禪がこの地に隠棲したのが起源。日禪は町衆はじめ戦国武将からも厚い帰依を受け、本殿は小早川秀秋の助力を得て、伏見城の客殿を移築したものといわれる。高倉天皇が小督局に下賜したという車琴を所蔵するが、これも秀秋が納付したもの。また、仁王門は本圀寺南門(南北朝時代築)の移築とされる。



☎075-861-0435
京都市右京区嵯峨小倉山小倉町3
アクセス:バス停「嵯峨小学校前」より15分
時間:9時~17時
料金:大人500円

光孝寺の門と陣屋がある 大覚寺

真言宗大覚寺派の本山。貞観18年



(876)、嵯峨天皇の離宮だった当地に創建された。応仁の乱により焼失するが、寛永年間(1624~1644)までに再建された。宸殿は東福門院(家康の孫)の女御御殿が移築されたものである。境内には明智光秀が築城した亀山城から移築された明智門・明智陣屋がある。嵯峨離宮の遺構とされる大沢池は、時代劇のロケ地としても知られる。

☎075-871-0071
京都市右京区嵯峨大沢町4
アクセス:バス停「大覚寺」よりすぐ
時間:9時~17時
料金:大人800円(お堂・大沢池)

ふし み も も や ま 32 伏見桃山

秀吉遺愛の手水鉢がある
海宝寺



伏見城跡を中心とするエリアで、伏見城の遺構のある御香宮神社や龍雲寺、豊臣秀吉ゆかりの海宝寺、模擬天守の立つ伏見桃山城運動公園などがある。

享保年間（1716～1736）、萬福寺の泉堂元祖によって創建された黄檗宗の寺院。当地は伊達家の屋敷跡とされ、境内には伊達政宗手植えの木斛が残る。また、方丈前には豊臣秀吉遺愛の手水鉢が据えられ、方丈の襖絵「群鶏図」は伊藤若冲の晩年の作と伝わる（現在は京都国立博物館所蔵）。黄檗宗の開祖・隠元が伝えたとされる中国の精進料理「普茶料理」が楽しめる（要予約）。

☎070-1347-9698
京都市伏見区桃山町正宗20
アクセス：近鉄電車「近鉄丹波橋」駅より12分
時間：9時～16時
境内自由



☎075-602-0605
京都市伏見区桃山町大蔵45
アクセス：近鉄電車「近鉄丹波橋」駅より20分
時間：6時～21時

伏見城の大手門を移築
御香宮神社

貞観4年（862）、すべての病を治すという奇



模擬天守がそびえ立つ
伏見桃山城運動公園

平成15年（2003）に閉園した伏見桃山城キャスルランドの跡地に整備された運動公園。園内には昭和39年（1964）に建造された伏見城をイメージした模擬天守が残る。現在は、耐震基準を満たしていない可能性があることから天守には登れなくなっている。ちなみに伏見城は、幕府が出した一国一城令により、元和9年（1623）廃城が決まり、天守は二条城に移築された。

跡の泉が当地に湧き出し、時の清和天皇より「御香宮」の名を賜ったのが始まり。豊臣秀吉は伏見城の築城に当たり鬼門の守護神として崇めた。本殿は徳川家康の造営、拝殿は徳川頼宣の寄進、また表門は徳川頼房が伏見城大手門を移築したものとされ、徳川家ともゆかりが深い。境内には伏見城跡の残石が展示されている。

☎075-611-0559
京都市伏見区御香宮門前町174
アクセス：近鉄電車「桃山御陵前」駅より4分
境内自由

鳥居元忠らの霊を弔う
龍雲寺(桃山善光寺)

天台宗の寺院。もとは深草にあったとされ、正徳5年（1715）、伏見奉行・石川備前守が、伏見城の戦いで討ち死にした鳥居元忠と配下300余名の霊を弔うため、5代将軍・徳川綱吉の念持仏であった観音菩薩像を本尊として、桃山町三河に再建したといわれる。寛政8年（1796）に信濃善光寺の阿弥陀如来像の御開帳が行われ、その像を模刻して以来「桃山善光寺」と呼ばれるようになった。明治31年（1898）、現在地に移転。



☎075-611-4854
京都市伏見区桃山毛利長門東町37
通常非公開

京都戦国年表

年号	西暦	月	出来事
永禄 8	1565	5	三好三人衆ら、室町幕府 13 代将軍・足利義輝を殺害（永禄の変）
永禄 11	1568	9	織田信長、足利義昭を擁して入京
永禄 12	1569	1	三好三人衆ら、本願寺の義昭を攻める（本願寺の変）
		2	信長、義昭のため二条城（旧二条城）の建設開始
		4	義昭、完成した二条城（旧二条城）に入る
元亀元	1570	1	信長と義昭の仲、不和になる
		4	千宗易（利休）、初めて信長に茶をたてる
		9	信長と本願寺の「石山合戦」始まる
		9	浅井・朝倉の軍勢、京都に迫る
元亀 2	1571	9	信長、比叡山焼討ち
元亀 3	1572	9	信長、「十七ヶ条の意見書」で義昭の非行を諫める
天正元	1573	4	信長、上京焼討ち、義昭の二条城（旧二条城）を包囲する
		7	信長、義昭を京都から追放、室町幕府滅亡（槇島城の戦い）
		—	村井貞勝、京都所司代に就任
天正 2	1574	6	信長、狩野永徳筆の洛中洛外図屏風を上杉氏に贈る
天正 4	1576	4	信長、完成した安土城に入る
		7	京都南蛮寺、献堂式を行う
天正 8	1580	3	信長、光佐と講和、石山合戦終わる
天正 9	1581	9	信長、京都御馬揃えを盛大に催す
天正 10	1582	6	明智光秀、信長を本能寺に攻め、信長は自害（本能寺の変）
		6	羽柴秀吉ら、山崎で光秀と戦い、勝利する（山崎の合戦）
		6	清洲会議
		10	秀吉、大徳寺で信長の葬儀を大々的に行う
天正 11	1583	4	賤ヶ岳の戦い
		6	秀吉、大坂城に入る
		—	前田玄以、京都所司代に就任する
天正 12	1584	3～4	小牧・長久手の戦い
		5	秀吉、山門（延暦寺）の再興を許可する
天正 13	1585	7	秀吉、関白となる
天正 14	1586	10	徳川家康、上洛して秀吉に臣下の礼を取る
		12	秀吉、太政大臣となる
		—	このころ、千利休、秀吉政権の内政に関与
天正 15	1587	6	秀吉、バテレン追放令を発布
		9	秀吉、豊臣姓を賜る
		9	秀吉、聚楽第に移る
		10	秀吉、北野で大茶会を催す
天正 16	1588	4	後陽成天皇、聚楽第に行幸
天正 17	1589	—	秀吉、内裏の造営を開始する
天正 17	1589	—	方広寺大仏殿完成

年号	西暦	月	出来事
天正 18	1590	—	秀吉、京都の都市改造に着手、「町割り」と寺院移転を行う
天正 19	1591	1	秀吉、本願寺を大坂から京都六条に移す
		1	豊臣秀長、死去
		2	利休、秀吉に切腹を命じられる
文禄 3	1594	8	伏見城（指月山）完成
文禄 4	1595	7	秀次、高野山に追われ自害、妻妾ら三条河原で斬殺
		8	聚楽第破却
慶長元	1596	7	慶長伏見大地震
慶長 2	1597	5	秀吉、再建なった伏見城（木幡山）へ入る
慶長 3	1598	3	秀吉、醍醐で花見の宴を催す
		8	秀吉、伏見城で死去
慶長 4	1599	3	家康、伏見城に入る
		4	秀吉の廟（豊国廟）完成
慶長 5	1600	8	西軍、伏見城を包囲、落城（伏見城の戦い）
		9	関ヶ原の戦い。西軍敗れる
		10	石田三成ら六条河原で斬首される
慶長 6	1601	5	家康、伏見に銀座を置く
		8	板倉重勝、京都所司代に就任
慶長 7	1602	2	東本願寺創建
		5	家康、二条城を造営する
		6	家康、伏見城を再建する
慶長 8	1603	2	家康、征夷大將軍に任じられ、江戸幕府を開く
		—	春、出雲阿国らかぶき踊りを始める
		—	角倉了以、安南へ朱印貿易船を派遣
慶長 11	1606	2	幕府、禁裏・仙洞御所を造営
		—	角倉了以、大堰川を開削する
		—	高台院、高台寺を創建
慶長 16	1611	4	後水尾天皇即位
慶長 17	1612	3	幕府、キリスト教禁止令を出す
慶長 19	1614	7	方広寺大仏鐘銘事件起こる
		—	秋ごろ、高瀬川の開削完成
		12	大坂冬の陣
慶長 20	1615	4	大坂夏の陣始まる
		5	秀頼・淀殿、大坂城で自害、豊臣氏滅びる
		7	武家諸法度・禁中並公家諸法度発布
元和 2	1616	4	家康、駿府城で死去
元和 6	1620	6	徳川和子入内。後水尾天皇の女御となる
寛永 6	1629	11	徳川和子、東福門院の院号を賜る